

Cuba

【キューバ】

写真・文＝篠田有史(フォトジャーナリスト)

未来の開拓者

ジリ(左)は小学4年生。両親はここから近くの町に引っ越したので、今は祖父母と暮らしている。彼女だけここに残った理由を尋ねると、友達がいるから、そして何より田舎の生活が好きだから、と答えた

ゲバラの戦没記念日に向けて、「ピオネーロス」になるためのセレモニーの練習に励む子どもたち



フロリダ海峡に面する大都市ハバナは、港を中心に発展してきた



子どもが低学年のうち、学校に親が迎えに行き、一緒に帰る家庭が多い

世界中が恐怖したキューバ危機から53年。再びキューバに注目が集まっている。危機と同じ年に始まった米国による経済封鎖は、今もキューバ国民を苦しめている。そんな中で、米国から提案された国交正常化は、キューバにとって願ってもないことだった。交渉は双方の思惑の中で進んでいくだろう。いつかキューバも米国的資本主義に飲み込まれていくのだ

ろうか。そして、容赦ない弱肉強食の世界になってしまおうのだろうか。20年以上、毎年のようにキューバに通い続けた経験から、この国の取材や表現の自由の制限には閉口している。しかし、それを差し引いても、キューバには優れた点がある。ご存知のように医療は無料で、住民の数に対する医師の割合は世界一だ。しかも、この国は、多くの医師を世界中にボランティアとして派遣

している。また、生まれて1年目から子どもを預かってくれる施設もある。そのおかげで、シングルマザーでもファザーでも、子どもを育てながら普通に仕事ができる。キューバでは離婚していない人の方がまだだから、この制度は不可欠だ。男女の賃金格差という、前時代的なものもない。さらにもうひとつ、キューバが誇るべきものがある。教育だ。



笑顔で遊ぶ子どもたちの後ろには、独立戦争を題材にした漫画のヒーローが描かれている



ハバナの旧市街にあるブラド通り。中央にある歩行者道には「カリオラ」というキューバならではの手作りキックボードで遊ぶ子どもの姿も



農村部には、いまだ水道が普及していない地域もある。井戸の水くみは子どもたちも手伝っている

革命を底辺から支えてきた「革命防衛委員会」の記念日が近づくと、子どもたちは、「ピオネーロス」の証であるネッカチーフを身に付け、夜回りをする



日（10月8日）に小学1年生は「ピオネーロス（開拓者）」のメンバーになり、さまざまな活動をしながら社会の一員として育っていく。この国の子どもたちが、未来を拓くピオ

ネーロスとして大きく羽ばたいていくためにも、国交正常化交渉が順調に進んでいくことを願う。もちろん、キューバの教育や医療制度が残ることが前提だ。

子どもは6歳になると小学校に入る。よく見る白の半袖のブラウスに、男子はえんじ色の半ズボン、女子はスカート風のキュロットの制服を着ているのが小学生だ。中学生になると制服はからし色に変わる。制服は有料とはいえ、配給制なのでほぼ無料に近い。もっとも、枚数が決まっているので大切に使うなくてはなら

ないが。小学校は6年で、中学校は3年。ここまでは義務教育となる。教科書は無料だが、先輩からのお下がりを使いまわすので、新学期には各家庭で教科書カバーを手作りする。どの学校に入るかは住所で決まるのだが、中学になると、越境して名門といわれる学校に通わせるために、コネを使う親もいる。コネはキ

ューバでは重要だ。中学を卒業すると、試験を受けて普通高校や専門学校に通い、そのあとに大学が控えている。もちろん、大学に入るには難しい試験があり、入学のために家庭教師を雇う親もいる。それでも入ってしまえば、大学も無料である。さらに、自閉症などの障害児の学校もあり、こちらは送

り迎えるバスも含めて無料だ。これだけ教育の機会に恵まれているとはいえ、問題がないわけではない。せっかく知識や技術を身につけても、それを生かす場所がないのだ。そのため、大学を出たのに働く先が見つからない人や、筏で米国へ命がけの亡命をする人もいる。キューバでは、ゲバラの戦没記念



家の庭は子どもたちの遊び場にも勉強場にもなっている。木の枝を折ると出てくる樹液を、その枝で作った小さな輪に塗って吹くと、シャボン玉ができる



農家は豚や鶏などの家畜を放し飼いにしている。時には、子どもたちのかっこうの遊び相手になっている



ハバナの新市街ベダード地区で開かれたコンサートの様子

ラテン音楽として有名なサルサ。にぎやかで軽快なキューバの代表的な音楽だが、そんなサルサの元となった音楽をご存知だろうか。民衆の心を歌う「ソン」。実は、雰囲気異なるこの素朴な音楽こそがサルサの生みの親なのだ。

ソンはスペイン語で「音」という意味。スペイン、アフリカ、フランスの移民がそれぞれ持ち込んだ音楽が融合してできたものだ。ソンは、200年以上にわたって暮らしの中の小さな娯楽として楽しまれてきた。今でも年配の人々を中心に愛され続けている。「豆売りが来たよ。豆売りが行ってしまおう」。家々の前を通り過ぎる行商人の掛け声。そんな日常の何気ない情景を歌った歌詞が特徴的だ。「コール&レスポンス」と呼ばれる歌の掛け合いも、まるで会話のようで楽しい。即興で自由に呼び掛けた歌詞に、相手も心のままに歌い返す。ソンに合わせて踊る男女のヘアダンスにも、自由な表現が織り込まれる。長い歴史を持つ伝承音楽でありながら、歌い手、踊り手が思い思いに自分らしさを表現できる、そんな魅力をもつ音楽だ。



ソンの演奏で使用される楽器。手前の「トレス」はギターに似ているが、弦が2本ずつ張られている

取材協力：塩田佳史、塩田珠希（キューバンサルサダンス教室）

地球ギャラリー

キューバの文化を知ろう!

キューバの食卓に欠かせない食材といえば豆。「アロス・コン・フリホーレス」も黒インゲン豆を使った代表的な家庭料理の一つだ。「アロス」は米、「フリホーレス」は豆という意味で、キューバの主食である米に黒インゲン豆のシチューをかけて食べる。子どもが大好きな料理で、たいていは多めに作って翌日も楽しむ。

作り方はとてもシンプル。豆を煮て、スパイスで味を調えればもう完成だ。だが、誰でも簡単に作れるからこそ、実は奥が深い。スパイスも、辛みではなく香りや味わいを加えるために使う。

家庭ごとに「おふくろの味」があり、子どもたちは、お母さんやおばあちゃんが食事の支度をするのを見よう見まねで作り方を覚えていく。

赤坂のキューバ料理レストラン「アイナマトウキョウ」の店主、ロベルトさんは、「うちではお父さんが作ってくるときが一番おいしかった」とふり返る。豆だけのシンプルなシチューなのに、自然のおいしさとスパイスの風味が最後の一口まで飽きさせない。ぜひ本場の味を堪能してみよう。

キューバ料理といえば
黒インゲン豆のやさしいシチュー

アロス・コン・フリホーレス



【RECIPE】

●材料(4人前)

ブラックビーンズ(他の豆でも代用可) 1 缶/サラダ油大さじ1/ベーコン100g/タマネギ2分の1個/ピーマン1個/ニンニク2かけ/ワインビネガー大さじ1/水カップ1(200cc)/クミンパウダー大さじ2/ベイリーフ1枚/塩小さじ4分の1/こしょう少々

- 1 タマネギ、ピーマン、にんにくはみじん切り、ベーコンは一口大に切っておく。
- 2 鍋にサラダ油を熱し、ベーコンを炒める。焼き色がついたら取り出し、ニンニク、タマネギを炒める。しんなりしたらピーマンを加えて軽く火を通す。ベーコン、ワインビネガー、クミンパウダーを加える。
- 3 ブラックビーンズ 1 缶と水 1 カップを加え、ベイリーフを入れて10~15分、弱火で煮込む。豆が崩れてきたら、塩こしょうで味を調え出来上がり。

【SHOP INFORMATION】



Cuban Restaurant Bar
Ahi Nama Tokyo

〒107-0052
東京都港区赤坂4-2-3 1F, B1F
TEL: 03-6435-5331
営業時間: 12~14時半(火~金)、
18~26時(月~土)、日曜定休